

我が日本でも、此の會と關係し始めたのは、自分が最初であつたが、其の後、京都や東京其他各地の人々が入會し、我が「天界」誌上にも『AASVO會』といふ略名で度々、記事に書かれてゐる。

此の會の第十三回春期總會が五月三十、三十一兩日マウント・ホリヨーク女子大學で開かれるからといふ通知を貰つたのは、ずつと、今年の始めの頃であつた。——自分は、渡米以前から馴染なじみになつてゐた此の會の會合に、是非一度は出て見たいと前からしきりに思つ



ては居たが、去る一九二二年の秋以來、常に都合が好くなくて、毎年二回づゝ開かれる總會に、今まで出席が出来なかつた。此の米國を去る日も近くなつて、漸く茲に目的を達することが出来るといふことは、自分にどつて可なり嬉しいことであつた。

マウント・ホリヨーク女子大學は米國東部に於ける有名な大學の一つで、ポストン市からは約百哩の道のりである。この大學天文臺長はミス・ヤング教授、其の下に、ミス・フアインスワースが助教授を

つとめてゐられる。昨秋、自分は、妻と共に、ヤング教授の特別な招待を受けて、ヤークイスからハーブードへ移る途中に此のマウント・ホリヨーク天文臺を訪問し、丸四日も滞留したことがあるので、地理は好くわかつてゐる。それに、今度の會の豫定によれば、

五月三十日、午後、會の役員會

同、三十一日午前、一同、アマースト大學天文臺を訪問

同、同 午後、總會

といふプログラムであつたから、自分は（役員では無いから三十日



の會に出る必要は無し)三十一日の朝、直接にボストンからアマースト大學へ行つて、遠足して來てゐる一行と合しやうと決心した。アマーストも昨秋往つたことがあるからグリーン教授始め、知り合ひの仲である。

三十一日午前六時四十分といふ早い汽車で、自分は獨りボストン北<sup>ノース</sup>停車場を出發した。鐵道はボストン・メイン線といふので、此れで西に向ふのは始めてである(昨秋はボストン・オルバニー線であつ

た)から、窓から何か變つた景色でも見えないかと思つてゐたが、米國の景色は此の歴史的なニュー・イングランドでも、やはり單調である。九時頃、バーリン驛を通過して間もなく、可なり美しい湖水の景色が見えたりで、其のほかは、何も眼を惹くものもなく、汽車は十時五十分にアマースト驛に着いた。驛の汽車時間は十時五十分であるけれど、町の一般の人々は夏<sup>サマー</sup>期時間を使つてゐるから、今は既に十一時五十分なのだ。大急ぎ、會員一行がマウント・ホリヨークへ歸つて行かない前に……と思ひつゝ、知つてゐる地理を幸ひ、大學



天文臺へ馳けつけたが、残念にも、一行は今數分間前に、自働車で去つたといふ跡で、グリーン教授が一助手と共に、「十八吋」の望遠鏡で金星を見てゐるところであつた。残念だけれど仕方が無い。

「御覧になりませんか」

と、すゝめられるがまゝに、自分も一寸臺ちよつとの上に乗つて美しい三日月形の金星の姿を見、それから、

「午後、また、マウント・ホリヨークで御目にかゝりませう。私は一足御先へ」

と挨拶して、電車で女子大學に行く。

女子大學のある南ハドレイ村へ着いて見れば、變光星會の一行は丁度今カレッジ・インで晝食の最中であつた。それで早速自分も其の中にとび込み、ゴドフレイ、マカテア等の諸君と同じ卓につく。——アメリカ天文學會といふ専門家の會合には、自分は今までに三度も出席したことはあるが、其れ等に比べると、此の素人アマチュアたちの天文會合は丸つきり氣分が違つてゐて面白い。あちらでは



「土星の輪は、いつたい、何から出来てゐるのだい？」

といふ質問を發して、隣りの兄あにい分ぶんに教へて貰つてゐる人があるかと思へば、こちらでは、又、

「一時の三十萬分の一だ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

と大聲に言つて、反射鏡の隨圓曲面と球面との違ひを食卓の上で數學好きに計算して貰つて笑つてゐる人もある。人氣者にんきもののD・Bビケリング君が

「僕は、死んだE・Cビケリング先生とは親類では無いんだ。残念だ

けれど……」

と自分の系圖の説明を向ひの人に聞かせてゐる。又、一隅では今朝の汽車の中の出来事を話し合つてゐる。

食事後、一同は天文臺の入口へ集まり、それから暫くの間、二三人づゝの上級の女學生たちに案内されて、學内の庭園や建物などを見てゐる。

午後二時半から、一同は大學天文臺の中の廣い講義室に集まり、



總會が開かれる。ミス・ヤング教授は此の變光星會の會長であるから、座長席につき、先づ諸係りより事務の報告あり。それから、研究の報告に移る。研究報告の中で、第一にレオン・カンベル氏は「本會と大英天文協會變光星部との比較」といふ題で、本會が創立以來既に十七萬回の變光觀測を成し遂げたことなどを誇り顔に報告した。因みに、現在、アジアから報告を送つて來る觀測者の數は七名であるが、其の内六名は日本からであるといふことも報告中にあつた。

次に、J E G ヤルデン氏は北極星を觀て赤道儀を据付ける方法に關する自己の經驗上の一文をよんだ。

次に、自分は、ボン星表中の變光星の數と分布について」といふ題で簡単な研究を紹介した。

最後に、ヤーキース天文臺のバークハースト教授の「ハーゲン變光星圖の新版について」といふ一文をミス・ファーンスワースが代讀した。

それから、マカテア君が近頃死んだマクドローエル氏（ピツバーグ



のブラシューア會社の有名な技師)の小傳を述べて、こゝに總會を終り、四時から皆打揃つてピアソン館に於いて大學職員及び學生たちの饗せらるゝ御茶<sup>テイ</sup>を頂いた。

午後七時から、カレッジ・インで記念晚餐會が開かれたが、之れが亦實に愉快なものであつた。デザート・コースに入つて、座長はD B ビケリング君が承り、先づ、女子大學教頭ミス・パーリントンの挨拶があり、次で、S E ヘイス教授の「色盲」に關する講演があつた。それ

から座長のユーモラスな紹介と共に、ミス・A J カノン、ミス・H W ビゲロー、W K グリーン教授C C ゴトフレイ氏及び自分の順序で卓上演説をやつた。

かうして會は和氣霽々の中に閉會となり、翌日各自は歸途についた。(一九二四・七・一六。ハーゾード天文臺にて)



## ホームズ氏を訪ふの記

C N ホームズ (Charles Nevils Holmes) 氏は少なくとも其の名だけは世界の天文家の間に廣く知られてゐます。私はポピュラー・アストロノミ (Popular Astronomy 米國の天文雜誌) に常々現はれる天文詩や美しい文章の記者として此の人の名を、よほど以前から知つてゐました。しかし昨秋ケンブリヂに來るまではホームズ氏が何所に住んでゐられるのかは好く知りませんでした。

ところが、ハーブード天文臺に來て間も無い或る日、平生愛讀するトランスクリプト (ボストンの日刊新聞) の或るページを見ますと、「冬の星々」と題した短かい一文がホームズ氏の名で出てゐるではありませんか！ それで私は氏が此の近くに住んでゐる人であることを知り大變嬉しく思ひました。しかし不思議なことに、當天文臺の中で、ホームズ氏の名は皆知つてゐても、誰も會つた人はないと言ひます。そこで氏の精しい住所を知ることが出來ず、少々弱りました。其の中に、また、トランスクリプト紙上に、同氏の春の



星座に關する文が載り其の終りに、ニウトン市アーリントン街といふ字を見付けました。之れで大に力を得、早速、

「御目にかゝりたいものです」

といふ手紙を書き送りましたところが、直ぐ、丁寧な返事が参り、又つゞいてホームス夫人から英子へ宛て、

「どうぞ御一所に御出で下さい。ステイションまで御迎ひに参りますから」

といふ音信がありました。——日は「來る六月四日」とありました。

さて、六月四日の水曜日、空は曇りでした。約の如く、二人で午後三時二十分ポストン南停車場から汽車に乘りましたが、距離は僅か十哩ばかりの所ですから、まもなくニウトン着。車から下りて見ると脊の高い笑顔の婦人が、

「ヤマモト様たちですか？ 私はミセス・ホームスです。」

と言つて迎えて下さるのです。

「ミスタ・ホームスは脚が悪いものですから、宅に御待ちしてゐます。どうぞ此の車に御乗り下さい」



そこで、きれいな自動車に乗せられ、夫人自ら車を禦して、アールントン街に案内されました。ニウトンの街路は、木立や庭園が多く、それが今さきまで降つてゐた小雨にぬれて美しく洗はれた装ほひでした。

白や紫のライラックの花が咲いてゐるホームス氏の家の入口に車が着きますと、ドアが開いて、中からは杖にすがつた主人ホームス氏が現はれました。背は低くありますが、全く氣品のある顔付に、愛嬌をたゞへて、氏は初對面の挨拶の手をさし延べられるのでした。

それから、直ぐ應接の廣間に通されましたが、ふたごみこと二言三言話しが進んだ後、

「書齋の方が好いでせう」

と言はれるので、主客は共々二階の明るい室に移りました。南向きの此の室は、窓掛けも一ぱいに開けて、いかにも押おつ開びらいた氣分。そこに手頃の机を置いて、十數冊の書物と、書簡紙やペン若干と、一臺のタイプライターとがありました。後ろには可なり大きい書架、壁には大小幾つかの肖像寫眞、又、天井には籠ケイッアンテナがV形に張



られて、其の一端から棚の上の無線受話器にワイアが續いてゐます。

「レデオを御好きですか？」

と聞くど、

「え、<sup>シングルチューブ</sup>單管器ですが、これでも好く聞こえます。シカゴやデブ  
ポートあたりも時々は聞えましてネ」

いかにも屈托くつたくが無さそう。

それから、一通ひんぱん、壁にかゝつてゐる寫眞の説明があつたり、窓か  
らボストン灣が見えると言つて景色を見せられたりしました。英子

は夫人と向ひ合つて、しきりに

「アメリカの食物は御好きですか？ 家の住み心地は？」

など、聞かれてゐます。

私は持つて來た「天界」四月號をホームズ氏に贈つて、いろ／＼と  
日本の事を話したりしましたが、氏は日本文を見て

「之れが讀めれば好いですにネ」

など、愛嬌を言はれます。それから、次に、こちらから聞くにまか  
せて、氏は自己の若い時からの事など色々話されました。精しいこ



とは略しますが、要するに、氏は一八九六年にハーブード大學を卒業されたのですが、在學中は神學を主として、尙、化學だの物理だの地質だのと言つたやうなサイエンスをも勉強したと言はれます。天文學は別に大學時代に勉強したのではなく、卒業後、自分で好むがまゝに獨り書物など讀んだに過ぎないが、

「私は天文を詩的に見るのが好きです」

なご言つてゐられました。之れで見ると、氏は廣い意味の文學者であつて、しかも現今のサイエンスを(ひとり天文學のみと言はず)

一般に精神生活の資料としてゐられるらしいです。家は裕福らしく、それに身體が不自由なので、今は之れと決つた職業は持つてゐられません。只日常は、暇にまかせて、詩文を作り、之れを新聞や雑誌に投稿してゐられるといふ至つて呑氣な生活ぶりです。かうした人の常として、自分が今までに書いた詩文を澤山スクラブ・ブックに張り付けて保存して楽しんでゐられるらしく、私に其うしたものを多く見せてくれました。

夕方にもなつたので、夫人の言ひ出しで、ホームス夫妻と吾々二



人と總勢四人で自働車に乗り、夫人自ら又車の禦者として、一通りニウトンの街々を巡り、それからコンモンエルス街をポストンに行つて有名な亞州公司以支那食を頂き、それから又暫くチャルス河畔をドライブした後、送られて、私共はケンブリヂに歸りました。

全く世間ばなれのした、呑氣な、又、愉快な半日でありました。

(一九二四・六・五。ハーグロッド大學天文臺にて)

### 畫帳より

今、デンマーク國でグドロン・ジャストラウ (Gudrun Jastrau) 嬢は有名な黑白畫シルエツトの畫家であります。同氏は數年以來ロンドンや米國諸所でも大に好評を受けました。近頃、デンマークのホルソエル (Korsør) といふ町の一學校に寄贈した數枚の珍らしい大幅の畫の中に、ここに掲げるやうなものがあります。此の圖は、「フレデリツキ二世天文家テヒヨ・ブラーへを訪問す」といふ題で、即ち、歴史的に言





アレキサンダー二世王天文學者テヒヨ・ブラーヘを訪ふ

一九八

へば一五二〇年十一月七日に王が同國ゼーン島にある此の有名な天文家の天文臺を訪れた事を書いたものであります。

(一九二四・七・一三。米國ハーグード天文臺にて)



### コロンブスの航海について

コロンブスのアメリカ発見といふことは誰知らぬ者も無い有名な事実であるが、それで居て、コロンブスの傳記にも又其の航海についても未だ世に知られてゐない事が可なり多い。近頃、「コロンブスの航海日誌」といふものが英語で出版された。但し、此の日誌といふのも、コロンブス自身が筆を取つて書いた原著ではなく、むしろ抄



録なのだが、可なり精しく、コロンブス自身の言葉をひいたりして、當時の事状を表はしてゐる。日誌の原著は一度バルトロメ・デ・ラス・カザスといふコロンブスの伴侶（ともだち）の手に渡つたのだが、後に紛失して、只此のラス・カザスの残した抄録が一七九〇年に古記録中から發見され、こゝに英文となつて現はれたのである。

コロンブスの時代は所謂天動説の信じられてゐた時代で、地面は動かすに、只、天の日月星辰のみが日々回轉するのだと總ての人は考へてゐた。しかし、幸ひにしてギリシャのヒバルコス以來、地面

が球形であることは知られてゐた。それに第十三世紀頃、イタリアのマルコ・ポーロが支那に遊んで、歸國後其の見聞記を發表した中に「世界の極東にジバングといふ金銀財寶の満ちた國がある」といふことを書いたが爲め、それから後は、歐洲の人々が一般に此の「東の黄金國」に憧がれを持つてゐたけれど、「世界の端で」までといふ長い旅行の必要が彼等の望みを夢にしまつてゐたのである。ジバングとは言ふまでもなく「日本」（ジパング）であつて、我が國が世界に紹介されたのは此れが最初であつた。



ところが

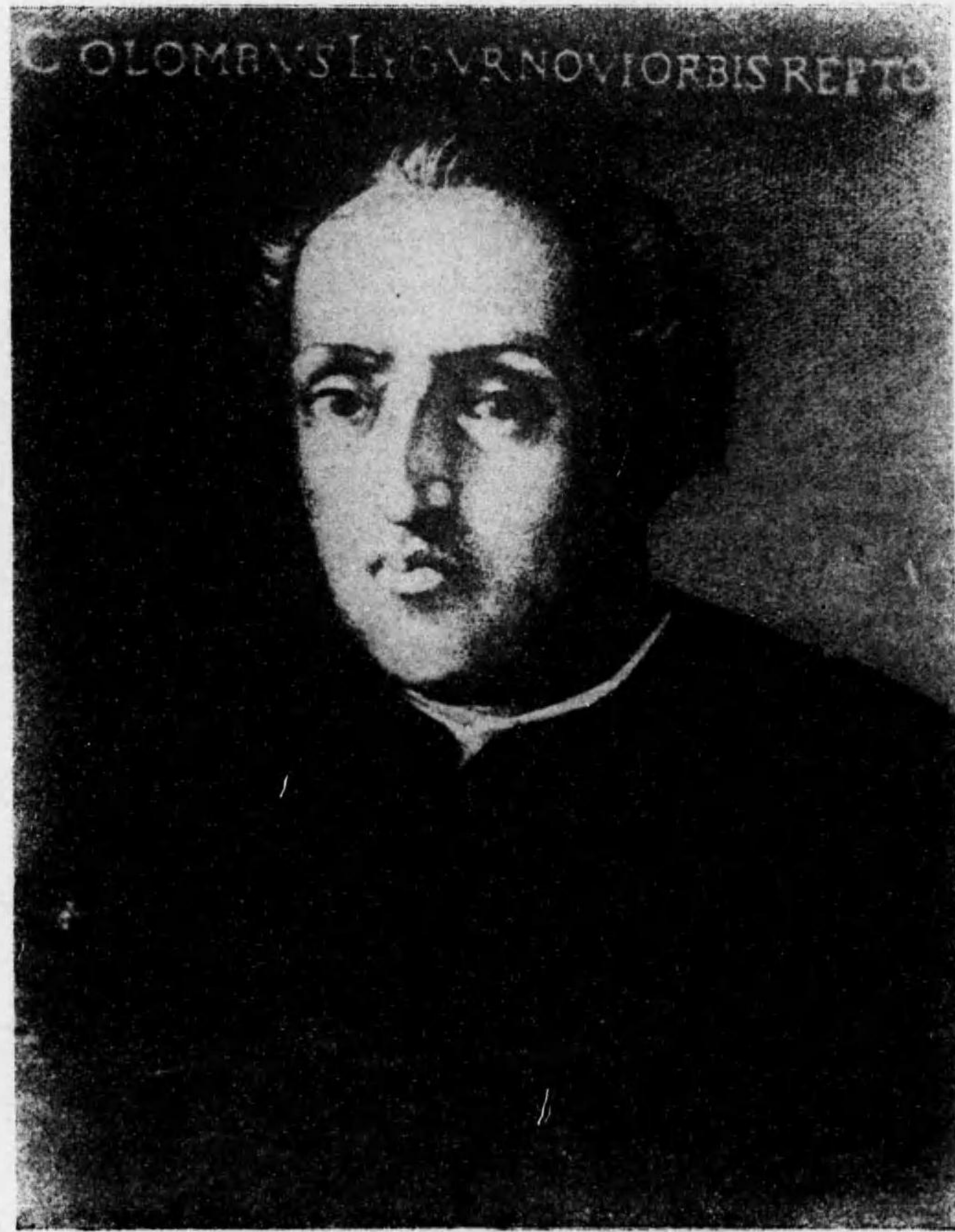
「世界が球たまごいものならば、極東へは、また西の方からも行ける筈で  
る

ど、當時の天文家たちが考へ始めたのは、尤も至極なことであつた。  
恰も、十五世紀の末、コロンブスの友人トスカネリといふ天文家が、  
イタリーのフィレンツェ町に住んでゐた。コロンブスの息子ドン・フ  
エルナンドに據れば、父コロンブスは此のトスカネリと交はつて、  
天文上の色んな知識を受けたばかりでなく、時々は例の「西への航

海」の空想を聞かされてゐたといふ。トスカネリがコロンブスへ書  
き送つた一四七四年の頃の或る手紙の中にも

「東の方にあると一般には思はれてゐる島々が西にもあるといつた  
つて、別に不思議でも何でも無い筈ぢやありませんか。東へ〜と行  
つて、東の邦に見るものは、又、西へ〜と行つて、やはり、西にも  
同様に見られる筈なのですから……こうした事を、今少し好く貴君  
に了解して頂くために、私は自分で今までに研究して見た事の結果  
を書きませう。私が言ふ其の島々といふのは、外國のあちこちと通





ス プ ン ロ コ

商する商人たちの住んでゐる所で、港には、世界中の何の港よりも多くの外國船が常に來てゐます。……國全體は大變に廣く、人口も多く、澤山の小國や小州に分れてゐますが、之れ全體を治める王様があります。王は『王の王』といふ意味で大カンと名乗つてゐます。云々。』

又、別の手紙には

「貴君が御出でになれば、きつと、廣い國々、大きい町々、富み榮えた所々を御覽になるでせう。そして、貴君の御訪問はその遠方の



王侯たちに大きな歡びを齎らすでせう。又、彼等と吾々クリスチャン國との間には交通の道が開け、吾々の正教や藝術の傳達が行はれることになりませう。」

かうして、トスカネリは、しきりにコロンブスの熱心を促した。始め、コロンブスはポルトガル國の名を以て遠征に出る筈であつた。しかし、遂に事實はスペイン國王の保護によつて行はれた事から見て、こゝに、コロンブスの遠征の目的が他に尙一つ在つたやうにも思へる。何故となれば、彼れは日誌の中に



「自分は、今回の遠征より得た利益を、聖都エルサレム征服の費用に捧げませうと陛下に申し上げたら、陛下は喜んで之れを受け入れやうと約し給ふた」

と書いてゐる。即ち、之れで見ると、歐洲では十字軍の壯舉を繰り返して、基督の聖墓を回々教徒の手から取り返さうといふ希望を絶つてゐない時代で、しかもスペインの朝廷では費用の出所を心配してゐた場合であつたらしい。尤も、果して、コロンブスの遠征より得た利益が十字軍の方へ用ゐられたか何うかは歴史に明らかでない

が、それでも、コロンブス其の人の筆によつて慙うした裏面史が表はされてゐることは興味深いことである。

未だ見ぬ西の國のことについて、當時の人々が互ひに傳へて信じてゐた事柄も面白い。中にも、コロンブスの義母の事が此の日誌に表はれてゐる。此の義母は其の亡夫の所持品であつたといふ海圖や諸記録をコロンブスに與へ、之れ等を讀んで、益々コロンブスは「西海遠征の熱心を増した」と自白してゐる。歴史家の見逃がすべからざる點である。



## 二

今も昔も、遠洋航海に天文学の助けを借らなければならぬ事は變りない。今ならば海圖や天體曆が立派に出來てゐるから、航海中の天體觀測などは只一定の公式通りにやつてゐて、大西洋を越えるぐらゐは容易であるけれど、四百年餘りの昔しに、不完全な天體表を頼りとして、何の見込みも無い始めての太平洋横斷は、けだし、無暴の擧と評する方が當り前であつたかも知れない。それでも、コロンブスは當時の天文家として最も信用のあるレギオモンタヌスの作

つた有名な天體表を携へ、又、可なりの磁針器コンパスを持つて、絶えず觀測と航海とを續けたのであつた。

今ならば一週間で横切る大西洋を、コロンブスの船は遅々として帆走し、海圖の示す日本ジパングの方向へ幾十日も航海をつゞけて、尙、陸地を見ることが出來なかつた。此の長い日數の中には、毎日く、只、水と天との外ほかに見るものも無く、従つて、非常に單調な其の日々であつた事は想像するに難くない。こゝに今或る一日の日誌記事を掲げて見やう。



「九月二十一日、金曜日。終日ほとんど静穏。午後、少しく風加はる。晝夜帆走續行、十三リーグ弱。朝、海面を全く埋めるやうな多くの雑草の浮ぶを見る。之は西より來れり、又ペリカン鳥を見る。海面は河の如く波靜かにして、天氣最上等。鯨を見る、之れ陸地近き兆なり。」

しかし、前途は尙遠かつた。とにかく、毎日少しづつは西へくと、故郷を遠ざかつて行くといふ心持ちが、水夫たちの心を暗くするばかりであつた。コロンブスは彼等の心の中をよく知つてゐた。

そして、九月九日に至つて、其の日記に

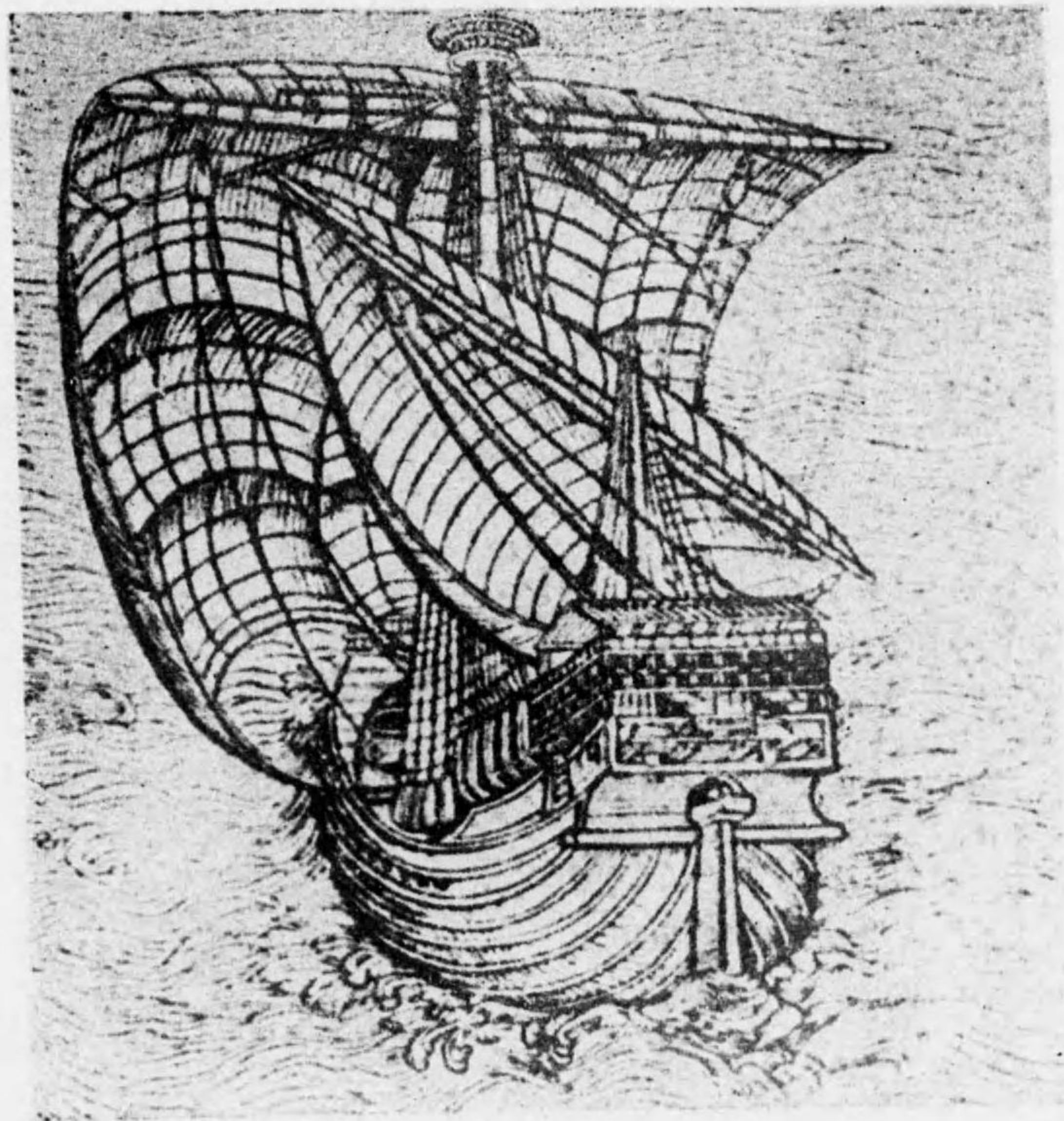
「此の日十九リーグを帆走す。航海の長びくため水夫等の惱なやみを思ひ、今後は航走里數を眞實よりも減じて記るすと決す」

と記してゐる——それでも此の往航の時は、丁度、海の荒れる時季の後であつたから 歸航の頃に比べるとコロンブスのためには幸福であつたのである。

## 三

十月十一日(木曜日)午後十時頃になつて、コロンブスは甲板上か





船の代時スプンロコ

ら海上を展望中、遠方に一つの燈火を見つけ、すぐ、下役したやくのペロ・グ  
チエーレスを呼んだ。すると、ペロも亦此の燈火を認めたので、い  
よ／＼未知の境に近づいたことが明らかになり、船中の一同は蘇生  
の思ひをした。

翌朝、船を島の岸近く乗り進めた後、コロンブスはスペインの旗  
を翻して、威風堂々と上陸した。しかし、見て、先づ驚いた事は、  
島の土人が皆裸體の蠻人に過ぎないで、豫想してゐた黄金國とは全  
く違つた風土であつたことである。それから、コロンブスは土人の



指すがまゝに、「黄金の島」をたづねつゝ、幾多の新島を發見したけれど、結局、ジバングとカタイ(支那)とは見付からず、歐洲へは豫想外れの御土産をもたらしたのであつた。蓋し、今から思へば、當時の天文家たちの見積つた地球の大きさが小さ過ぎ、それに反してアジア大陸が大きく考へられてゐたからであつた。それにしても、此の有名な大遠征が、コロンブスの勇氣と豪膽とによつて敢行せられ、前古未知の新世界を發見したことは、いろんな意味に於いて人類歴史上の大記録たるには違ひない。



毎年十月十二日はアメリカに於いて此の大発見を記念するための祭日とされてゐる。(一九二四・七・十。米國ハーワード大學天文臺にて)

### HNラッセル教授の宗教観

今、米國の天文學界に對立する大立者は

「西にカンベル、東にラッセル」

の兩博士である。カンベル氏は、過去二十數年間リク天文臺長として活躍した人で、今年の春からは推されてカリフォルニア大學總長になりましたが、同時に、今尙リク天文臺長を兼ねてゐます。ラッセル教授は、Cヤング教授の後繼者として、十數年前にプリンスト



ン大學教授に擧げられた人がありますが、殊に一九一四年頃、新しい天體進化論を發表して以來、俄に米國天文學界の重鎮となり、多くの若い天文家を手許に養ひつゝ、絶えず宇宙構造學の研究をしてゐます。二三年來キルソン山天文臺のアツシエトに推され、ために、毎夏カリフォルニアへ出張して行かれます。

私は渡米以來二三度ラッセル教授に會ひました。教授は右に述べた如く、理學者として世界的の名聲を擧げてゐるばかりでなく、他方に熱心なる基督教信者として、敬虔なる宗教生活を送り、時々は

プリントン大學附近の教會をたすけて、日曜日などには牧師の代りに説教をせられるのです。

近頃、フィラデルフィア學會の出版物として發表された小冊子の一に、ラッセル教授は理學者の見たる其の宗教觀を述べて居られます。其中に左の如き言葉があります。

「現今、社會のあらゆるものが破壊改革されやうとする困難の時代にあつて、永遠の神と其の榮業とを固く信する人は幸福である。」  
「吾人は宇宙の大きさや壽命を未だ測り當てることは出來ないけれ



ど、しかし、我が地球でさへ十億年以上の年月を経たものであるといふ證據を明かに知つてゐる。——して見ると、生命といふものも、やはり、此れ程永い間、既に世界に存在してゐたものらしい。」

「吾人の面<sup>めん</sup>と向つてゐる此の宇宙を大觀して見ると、總ての部分に秩序があり、其の性質や機能は一々の構造によつて確定せられ、あらゆる物、動物、植物、殊に人間こそは、時間と空間<sup>くわん</sup>を通じて簡單な一般法則の下に集まつてゐる根元素から出來た最も複雑な、しかも最も調和に富んだ産物の好例である。」

「此の立派な秩序法則のことを心に考へて見ると、たゞもう何となく有難いといふ尊敬の念が起らざるを得ない。」

(大正十二年十月二十

日、米國キルソン山天支臺にて)



## 噫、佐々木哲夫君

「ササキテツヲ二二ヒゴゴ六シスセイゼンノカウイヲシヤス」

此の電報を受取つたのは、去る二月二十三日の夕暮で、自分は宅で妻と食後の無駄話をしてゐる時であつた。丁度其の無駄話の中で、『佐々木君はごうしてゐるだろう。最早、好くなつて歸つて來るのも遠くはあるまい』

なご、樂觀的な心であつた矢先であつたから、此の電報は、始め一

目見て、ごうしても本統とは思へず、誰か惡戯いたづらをしてゐるのではあるまいかといふ氣さへして、むしろ一種の腹立はらだしさをさへ感じた。

——しかし心を落付けて見れば、電文は嚴として、正しく事實を報じてゐるのである。くりかへし其の文意を確めると共に、忽ち胸中には、言ひしれぬ悲しみと淋しさが襲ふて來るのであつた。

『あゝ佐々木君は去つたのか！』

かう叫んで妻と顔を合はせたまゝ、次の語が出なかつた。

佐々木君と自分と相知つたのは、大正四年であつた。其の頃、自



分は研究のため、岩手縣水澤の緯度觀測所にゐたのであるが、思へば其の年の四月末の或る日、——まだ此の地方では暖かな春の日の訪れない何となくうら寒い日であつた。佐々木君は佐藤君の紹介状を持つて來訪せられた。聞けば、近頃盛岡師範學校を卒業したのであるが、病氣のため直ちに就職せず、醫師のすゝめにより當分靜養するのだといふ。それから、元々天文學が好きで、此の日自分を訪ねて來たのも、つまり去る頃、自分が或る雜誌に天文の一事項を寄稿したのを讀んで、始めて名を知つたのによるとか。丁度此頃、自分

は研究の餘暇の話し相手が無いのを淋しがつてゐた時であつたので、其の日は可なり長く同君を引きとめて、天文の話やら、天文でない話やら、いろんなことを話したと覺えてゐる。御蔭で、其の夕暮時に、宅を辭し去られた時には(初對面ながら)互ひに可なり名殘を惜しんだ。

佐々木君の郷里は水澤と同じ岩手縣ながら、距離は十五里も距たつてゐて、汽車で一の關に下りてから、まだよほど長い山道を越えなければならぬのだといふ。しかし差當さしあつて、身に職が無いとい



へば呑氣のんきは呑氣で、往復の道の遠いのは、案外、苦くにもならないらしく、同君は其の後も度々やつて来て、木村博士やら自分やらを相手に質問や研究をせられた。何しろ師範學校在學時代からも優等生であつたとやら、殊に天文學を修めるために必要な語學と數學とが得意どくだと來てゐるから、殆んど獨學の進歩しんぷは非常に速かつた。少し大袈裟おかしに言へば、手當り次第に總ての書物を讀破して行くといふ調子で、一ヶ月目か二ヶ月目にか、毎度郷里から水澤に來らるゝ度毎に、常に必ず新しい收穫が見えた。遂に自分には、

『此の人は病氣靜養期を消すために勉強してゐるのか、或は勉強したために病氣になつてゐるのか』を疑はれるほどであつた。

佐々木君の獨學の熱心は、彼れが最後まで武器であつた。自分は大正五年の春に水澤を辭して、京都に歸つたが、同君は其の後も、やはり時々水澤へ行つて、専ら木村博士の指導を受けたりしく、同君の手紙や、博士の御言葉によると、大正六七年頃には、獨逸語を自習して、遂にはクリンケルフェスの理論天文學を讀むまでに漕ぎつけたといふ。現に自分の所へも練習かたぐいだと言つて、獨逸文



の書面を二三度よこされたことがある。

永く交つて見ると、佐々木君は單なる科學上の天才といふのみでなく、音樂にも、繪畫にも、又一般の文藝方面にも深い理解を持ち、尙、思想問題にも一見識を抱いてゐたやうである。自分も宗教や哲學には少しばかりの興味を持つてゐるところから、同君の意見を知りたいために、或る問題を以つて數度議論を交して見たことはあるが、遂に徹底した持論を聽くことを得なかつたのは、今尙頗る残念に思つてゐる。

大正七年には病氣が全快したからとて、同年四月からは一小學校に奉職するやうになつたが、此の教壇上の活動は、同君として餘り氣が向かないらしく、やはり自らは「もつと自由に勉強したい」と、來る手紙毎に、そんな意向を漏らしてゐられた。

大正八年春、いよいよ教職を辭して、京都大學天文臺に入らるゝやうになつたのは、確かに同君のためにも、又、京都天文臺のためにも喜ばしい一新時機であつた。自分は同君が始めて京都の土地に足を踏み下された日、七條驛に之れを迎へた時の印象を今も鮮かに



覺えてゐる。其の時、自分としては丸三年ぶりに元氣な同君の顔を見るといふことが既に（ごく簡人的ではあるが）大なる喜びであつたが、同君自らは、もつと雄大な喜びがあり、又、満面希望と得意に充ちた花婿はなむこのやうにも見えた。（凱旋將軍の如しといふのは、少しく不適當だと思ふが。）

京都に來られてからの佐々木君は、やはり徹頭徹尾勉強の人であつた。但し天文臺の職員としては、やはり公人であるから、先年、郷里で靜養中の頃のやうに勉強のための絶對自由といへなかつたか

もしれない。何となれば單なる御役所風おやくしょふうの事務も少しは有つたから。けれど、何と言つても、それは範圍の狭い一局内の事務であり、又それが、仕事の性質上、研究に直接關係があることのみなので、此等は決して同君の勉強を妨げるほどのものではなかつたと信ずる。同君は暇があれば、乞ふて諸教授の講義を傍聽し、堂々たる大學生達たちと席を同じくして、自ら其の才を磨いた。又、晴夜には、勿論、天文臺に居残つて、自分等と協同觀測に従事した。此の頃、天文臺内の平常の話相手は百濟君と同君と自分と三人で、此の三人が日曜と



いはず、祭日といはず、又夜となく、晝となく、顔を合はせてゐたのであるが、今も思ひ出すことの一は、佐々木君が身體の健康には特別に注意を拂つてゐたことである。百濟君と自分とは觀測の都合上ずるぶん遅くまで夜を更かし、時々徹夜することもあつたけれど、佐々木君は決してそんな無理はしなかつた。夜半までには必ず宿に歸つて安眠し、其の代り、朝はよほど早く床を離れて吉田山に上るのが、きまりであつた。流星は嘗て病氣に惱まされた人だ自分共は常に感心してゐた。

天體觀測の中で、佐々木君が最も忠實熱心にやられたのは、恒星の子午線通過による時刻觀測であつた。之れは天文臺其のもの、性質上、言はず一種の義務的觀測ではあつたが、同君は委托された此の仕事を決して義務だからといふ顔をせず、むしろ頗る研究的な態度を以つて、熱心に、且つ忠實にやられた。之れによつて、自働印字器等に改良を加へられた點も少なくない。

しかしながら、佐々木君をして、一躍、世界的の名を馳せたのは、確かに、かの彗星の發見であつた。尤も彗星の搜索といふことは、京



都でも同君だけがやつてゐたのでは無い。又同君としても、ずるぶん以前から、晴れた夜には西天を捜されたのである。殊に大正八年十月中旬頃、米國からはメトカーフの発見した彗星が二つも見えるといふ報知が来るやうになつて、推算位置の不明な此の二彗星を、我々は毎夕毎曉苦心して捜したものである。結局、メトカーフ第一彗星は自分が十九日拂曉の東天に之れを見出し、同第二彗星は佐々木君が同十九日夕暮の西天に、それらしいものを認めた。しかし尙之れにも飽き足らず、佐々木君は其の次の日も、次の日も、望遠鏡を

西南の空にむけて、目ぼしい天體を捜してゐられた。

十月二十六日、此の日、空はよく晴れたが、自分は用事があつたため、日没後、メトカーフ彗星を觀測した後、九時頃歸宅した。すると間もなく十時頃、佐々木君が、突然、宅へやつて来て、

『只今、新彗星らしいものを見ました』

といふ。其の顔は可なり緊張してゐた。自分は驚いて、先づ其の發見事情を精しく聞くと、同君が言ふのに、

『昨夜、八時半頃、四吋望遠鏡で山羊座へ星附近を捜してゐますと、



突然大きな星雲状のものが見えました。今夜又それを見ると、既に位置をかへてゐて、現に半時間ほどの間にも確かに動いてゐるのが知れました。』

『それぢや今から直ぐ僕も行つて、それを見よう』

『しかし今は最早西に没した頃ですから、明日でなければ見えません』

なるほど其の時は十時を越えて、山羊座あたりは没してゐる頃であつた。

翌二十七日は朝早くから例の三人が相談をした結果、(丁度此の頃、新城博士は米國漫遊中であつた) 昨夜佐々木君が見た星は確かに新彗星に違ひないと決し、取りあへず東京天文臺に電報を打つた。それから西洋諸國にも知らせる筈であるが、之れには今一度観測をして、運動の様を知つてからにしようと思つた。

二十九日には完全な観測が行はれた。最早何の疑ひもない。そこで三十日にはコペンハーゲンとハアヴアドへと二通の發見電報を認めしたが、學長の許可を得るため、少々手間を取つて、發電は翌三十



一日、丁度天長節祝日の日、佐々木君が自ら京都電信局へ打ちに行つた。

此の彗星が全くの新來者か、或は週期彗星の再現したものかとは、我々の次の問題であつた。何しろ固有運動が非常に速いので、ただの星では無いと思つたが、之れについては東京の神田氏が逸速くフインレー彗星の再現であると推定せられた。しかし此の星が以前の星の再現であるか否かは、今の場合大した問題でない。それは要するに理論家の問題である。事實としては佐々木君の此の彗星が、世

界中の誰も知らないものを、熱心によつて発見したのだといふことで充分である。之れを世界的に見るときに、年々、天文學界に発見される彗星の数は、三個か或は五個かといふ程度のもので、大して珍らしいものではないが、我が日本に於ての彗星発見は今までに一度も無かつた。今、我が佐々木君によつて行はれた此の発見は、實に本邦最初のレコードを作つたものとして、遠く後世にまでも傳へらるべき事件であるが、尙いろんな事情を見ると、佐々木君の彗星発見は、單に此のフインレー星のみではない。前に述べた通り、十



月十九日の第二メトカーフ星の発見も、當時同君の手許に、何も積極的な材料を持たずに、やはり熱心によつて先づ発見し、後になつて之れがメトカーフ星だと知れたのであるから、此の場合も亦、新発見の名譽を同君に歸すべきである。不幸にして此の後者が世に餘り認められないのは遺憾のことと思ふ。——佐々木君は實に一週間以内に二個の彗星を発見したのである。

大正九年に入つて、火星や木星の接近といふ事があり、佐々木君は夜は又此等の観測をつゞけられたが、晝はやはり講義をきいたり

研究をするのに多忙であつた。

此年の夏、自分は文部省の囑托によつて、二ヶ月ほど新潟縣下に観測旅行を試みたが、其の旅行中に出張先へ佐々木君から届いた一枚のハガキは、少からず自分を驚かした。中には『病氣のため、醫者のすゝめによつて、歸省養生する』といふ意味が簡單にかいてあつた。『最早大丈夫と思つたか……』と言つたまゝ、自分は此のハガキを見つめて、暫くは考へ込んだ。『病氣とは何だらう。以前の再発か？』いろ／＼と考へたが、明かではなかつた。兎に角之れも運命



かと觀じ、一向其の快癒を祈るより外には途がなかつた。

夏の暮れ、旅行から歸つて、研究室に君の不在中の机を見た時は淋しかつた。しかし、始め歸省した時の容態が、敢へて重態といふ程ではなかつたけれど、夏休みの休養を兼ねて歸省した方がよからうと醫者からのすゝめによつたのであると言ひ、又、歸省してからも漸々好い方であるといふ手紙が來てゐたので、

『秋にでもなれば、又來られるに違ひない。』  
と思つて、自分等は餘り心配はしなかつた。

同君自身も、靜養中ながら、やはり好きな星は見すには置けないと見えて、十一月の末頃であつたか、

『オリオン座の東に彗星らしいものが見えるから』調べてくれといふハガキが來たことがある。之れは調査の結果、同君が双眼鏡だけしか手許に持つてゐなかつたゝめ、星雲を見誤つたものと知れ、こちらからは其の由を返事したが、兎に角、病中にも觀測をやつてゐたのには、聞く者が皆驚いた。

歳の暮に近づいても、同君は歸つて來なかつた。しかし病勢には



變りがなく、只、醫師の言により、北國の冬を過すため、年末から或る病院に入ることになつてゐるとの報知があつたが、之れも自分等には大事件らしくは見えなかつた。毎日、氣にはかゝつてゐたが、時々の手紙をたよりにして、喜びの希望のみを持ち、『その内にく』と待ちつゞけた其の期待が、遂に萬人の望む通りにならないで、『死す』の電文によつて報いられたのは遺憾此の上もない。

今となつては總てが思ひ出の種である。研究室に残されたさまざまの遺物——其の中には同君が科學者としての精密觀察と、藝術家

としての表現慾を、一管の彩筆に托して書いた大きくて美しい火星の圖がある——それから紙片に記された手蹟など、あらゆるものについて、自分には今尙鮮かな記憶が生きてゐる。殊に自分との最後の別れといふのが、今年の夏の始め『出張して來ます。さよなら』と言つたきりで、彼れも我れも之れが最後の別離とは毛頭思つてゐなかつたのだから。

短かつた彼の一生、殊に其の中でも天文家としての得意時代は二年に満たない。しかし此の短かい月日の間に、彼れは一躍して世界



に其の名を擧げ、又忽ちにして世を去つたことは、彼れが発見した彗星其のものを擬人化したかのやうに、華やかにして又憐れであつた。あゝ彗星発見者自身が一個の彗星的奇才であつたのか。

自分には佐々木君のことは涙なしには書けぬ。(一九二一・五・二〇)

星

大正十五年三月七日印刷  
大正十五年三月五日發行

星につながる人々  
定價一圓八十錢



著者	山本一清
發行者	東京橋本町二丁目十五 福永文之助
印刷者	東京橋本町五番地 渡邊吉郎

發兌

東京・京橋・尾張町  
振替東京五五三番

警醒社書店



植村 正久著	信 仰 の 友	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
植村 正久著	靈 性 の 危 機	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
徳永 規矩著	逆 境 の 恩 寵	□ 定價一圓十四錢 送料書留十四錢
網島 佳吉著	逆 境 の 福 音	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
内村 鑑三著	苦 痛 の 福 音	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
内村 鑑三著	基 督 信 徒 の 慰 め	□ 定價七十錢 送料 六 錢
内村 鑑三著	求 安 錄	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
賀川 豊彦著	苦 難 に 對 する 態 度	□ 定價一圓八十錢 送料書留十八錢
武本喜代藏著	信 仰 に 生 きて	□ 定價一圓六十錢 送料書留十八錢
田中 龍夫著	天 地 生 き 活 く	□ 定價一圓二十錢 送料書留十四錢

別所梅之助著	運 命 以 外 の 一 路	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
別所梅之助著	山 の し づ く	□ 定價二圓三十錢 送料書留十九錢
別所梅之助著	武 藏 野 の 一 角 に 立 ち て	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
畔上 賢造著	宗 教 詩 人 としての ブラウニング	□ 定價一圓八十錢 送料書留十八錢
内村畔上共著	平 民 詩 人	□ 定價一圓三十錢 送料書留十四錢
渡邊 善太著	舊 約 書 の 文 學 預 言 文 學	□ 定價三圓 送料書留廿一錢
渡邊 善太著	舊 約 書 の 文 學 詩 歌 と 劇	□ 定價二圓二十錢 送料書留廿一錢
渡邊 善太著	舊 約 書 の 文 學 歴 史 文 學	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿五錢
柏井 園著	ヨ ハ ネ 傳 研 究	□ 定價二圓八十錢 送料書留廿一錢
松本 雲舟譯	バ ン ヤ ン 天 路 歴 程	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿四錢



山田寅之助著	耶蘇傳	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
柴田勝衛譯	ハビニーきりすこ傳(上)	□ 定價二圓 送料書留十八錢
波多野精一著	基督教の起源	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
小崎弘道著	基督教の本質	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
賀川豊彦著	イエスの宗教と其眞埋	□ 定價二圓二十錢 送料書留廿一錢
賀川豊彦著	イエスの内部生活	□ 定價二圓 送料書留廿一錢
賀川豊彦著	イエスの姿	□ 定價六十錢 送料四錢
道籟泰誠著	阿彌陀佛より基督へ	□ 定價一圓五十錢 送料書留十六錢
小野一樹譯	耶蘇の理解へ	□ 定價一圓五十錢 送料書留十五錢
門馬紫苑譯	女アデイナミイエス	□ 定價二圓 送料書留廿一錢

下村孝太郎著	靈魂不滅觀	□ 定價二圓 送料書留十八錢
有馬純清著	心靈現象研究	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢
田中龍夫著	物質觀の革命	□ 定價一圓四十錢 送料書留十七錢
木村徳藏著	兩性問題と生物學	□ 定價五圓五十錢 送料書留三十錢
松村松年著	最近昆蟲學	□ 定價三圓 送料書留廿五錢
留岡幸助著	自然と兒童の教養	□ 定價一圓七十錢 送料書留十八錢
大川周明譯	リシャル永遠の智慧	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
牧野英一著	最後の一人の生存權	□ 定價五十錢 送料四錢
吉田源治郎著	肉眼に見える星の研究	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿一錢
久留弘三著	ホルムス暴力否定	□ 定價一圓二十錢 送料書留十四錢



田村 直臣著	信仰五十年史	□ 定價二圓 送料書留十八錢
田村 直臣著	聖書辭典	□ 定價三圓 送料書留廿三錢
警醒社編纂	聖書の常識	□ 定價一圓二十錢 送料書留十四錢
日高 善一著	基督者の常識	□ 定價二圓 送料書留十八錢
松本 雲舟編	日々の祈り	□ 定價八十錢 送料書留十四錢
内村 鑑三著	英和對照 愛 吟	□ 定價五十錢 送料書留十四錢
内村 鑑三著	英余は如何にして 文 基督教信徒となりしか	□ 定價一圓 送料書留十四錢
内村 鑑三著	宗教座談	□ 定價七十錢 送料書留六錢
日本基督教會編	我等の講壇より	□ 定價一圓 送料書留十四錢
山本美越乃譯	デビス新島襄先生傳	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿一錢

蘆谷 蘆村著	基督教童話寶玉集	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿六錢
蘆谷 蘆村著	新約こども聖書	□ 定價一圓三十錢 送料書留十八錢
蘆谷 蘆村著	舊約こども聖書	□ 定價一圓八十錢 送料書留十八錢
五來 素川譯	マロー・未だ見ぬ親	□ 定價一圓八十錢 送料書留十八錢
皆田 篤實著	母の典型〔モニカ傳〕	□ 定價九十四錢 送料書留十四錢
松村 介石著	新 宗教	□ 定價二圓二十錢 送料書留廿二錢
黑崎 幸吉著	聖書の讀み方	□ 定價三十錢 送料書留四錢
大橋 房子著	イスラエル物語	□ 定價二圓 送料書留廿二錢
今泉浦治郎譯	サイラス・マアナ	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿二錢
元田作之進著	求道者に與ふる書	□ 定價二十錢 送料書留四錢



松本 雪舟譯	パンヤン・聖 戦	□ 定價二圓八十錢 送料書留廿六錢
柏井 園譯	ニコル・基 督 傳	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿二錢
鎌田 研一譯	ユウセビウス・信仰史 <small>前篇</small>	□ 定價二圓八十錢 送料書留廿二錢
黒崎 幸吉譯	ルーテル・加拉太書 <small>註解</small>	□ 定價二圓 送料書留廿二錢
原田 助閑	フレibel・人の教育	□ 定價二圓八十錢 送料書留廿四錢
高垣勳次郎譯	バート・パウロ 傳	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿四錢
道旗 泰誠著	ラゴラの出家	□ 定價一圓八十錢 送料書留二十錢
柳 一 宣著	朝の生命に燃えて	□ 送料書留二十錢
谷口 茂壽著	創世記及馬太傳正解	□ 定價二圓五十錢 送料書留廿四錢
逢坂 信忠著	暗黒より光明に	□ 定價二圓三十錢 送料書留廿二錢

徳富健次郎著	小寄 生 木	□ 定價三圓五十錢 送料書留廿四錢
徳富健次郎著	小黒 潮	□ 定價一圓五十錢 送料書留十八錢
徳富健次郎著	順 禮 紀 行	□ 定價一圓八十錢 送料書留十五錢
永島 忠重著	野 草	□ 定價一圓五十錢 送料書留十五錢
山中峯太郎著	「彼れ在り」この直感	□ 定價一圓八十錢 送料書留十九錢
山中峯太郎著	我れ爾を救ふ	□ 定價一圓九十錢 送料書留十九錢
村田 勤編	我子の思ひ出	□ 定價二圓五十錢 送料書留十八錢
松村 介石著	リンコルン 傳	□ 定價一圓 送料書留十四錢
松村 介石著	男 女 青 年 訓	□ 定價八十錢 送料書留十四錢
住谷 天來譯	カーライル英雄崇拜論	□ 定價一圓九十錢 送料書留廿一錢



# 星座の親しみ

四六判背布装  
星座圖一葉附裝釘  
定價一圓  
送料書留十一錢

士博學理授教助大帝  
著 清 一 本 山

眞夜中に星ぼしが 空に浮ぶは何のため  
こちの世界へ歸つて來い 街の燈火にしてやらう  
と印度詩人タゴールも歌つた。見る眼で見れば星には心がある、純潔と崇高な魂がある。詩人は歌ひ、哲學者は想ひ、科學者の索める壯嚴清淨な星座の神祕！ 然し星の美と興趣とは、整然たる星ぼしの運行系統と豊かな傳説を知るに至つて絶頂に達する。著者は京大に於ける少壯の天文學者、四季に起る天界の變化を説くに時に東西の文學を引用し、時に譬喩傳説を混へ、自然科學を巧みに詩化して、ごんな素人をも天文趣味に引入れば止まぬものがある。眞に宇宙の美に觸れんと思へば、先づ天を仰いで星座の美を味はへ

# 火星の研究

四六判フランス装  
寫眞版凸版廿五葉  
定價一圓五十五錢  
送料書留十五錢

士博學理授教助大帝  
著 清 一 本 山

二年目毎に地球めがけて

肉迫して來る謎の火星！

夜毎くの晴れた空を飾る星の輝きは、美そのもの、權化として、又嚴肅と平和を象徴するが、此處に天上の平和を破る怪星として、其現はれ來たるや突如、毒々しい光輝を放つて天の中心を往復蹂躪し、衆人の前に謎の如き舞踏を一舞ひ舞つた後、忽ちにして空の一隅に消え去る、それが火星である。古人は此を戰神マーズとして畏怖したのだが、不思議やその怪星は二年と五十日毎に中空に現はれて、しばしば世界の人心を驚怖せしめるのだ。怪星マーズに秘められた謎とは何ぞ？ その謎を解かんとせば本書に就け



肉眼に  
見える

# 星の研究

四六判四二〇頁  
定價三圓五錢  
送料書留十五錢

天文同好會  
吉田源治郎著

バビロンの宗教は星に依て生れ、ギリシヤの藝術も星に依て養はれたのでした。この人間に恵まれた最も美しい習慣である星を見るものが、近世の望遠鏡の出現に依て遂に専門化したことは、民衆の美的生活に於て餘りに悲しい出来事です。けれども過去の天文學史は、肉眼に依ての觀測史です。水々しい二つの肉眼が、如何に驚く可き數々の發見と美しい魂の住家を造つたかを考へた時、再び肉眼の偉力を信せずにはゐられない。本書は再び天文趣味を、民衆の生活に取戻すための努力であつて、どんな素人が見ても直ぐわかるやうにつゞく肉眼に見える星座の圖を挿入し、星々にまつはる優麗な古人の心に湧いた傳説を記載してあります。

天文  
講話

# 天文と人生

四六判三頁  
定價一圓五十錢  
送料書留廿錢

帝大教授理學博士  
山本一清著

『人と宇宙——それに何の關係があるか?』と人は云ふ。然し今一步廣い立場から天文學を見なほすなら、天文學の役目が單にタイムの觀測と經緯度の測量だけではなく、物理、化學や地質學と離れられない關係があり、原子論や電子説、相對原理等が論じられる時にも、又無線電信電話の發明にも天文學が大きな役目を演ずることを知る筈であり、更にもつと自由な立場から見れば、神話や宗教や藝術や哲學などの人の精神文化の開拓に、天文學が昔からどれ程貢獻したかを知る筈である。宇宙の進化や構造の研究が、人間活動の凡ゆる方面に有形無形の影響を與へることは必然であり、人はその住む宇宙を知ることによつて己れ自身を知り、己れを知るは眞に知識に達する始めである。本書は萬有基本科學としての最近天文學の種々相を説いたもので、苟も二十世紀人としての根本知識を要求する新人の必讀書ではないか。



# 宇宙開拓史講話

四六判二百三十頁  
寫真凸版四十六圖  
定價二角  
送料書留廿錢

士博學理授教大帝

著清一本山

其昔、バビロン、埃及、希臘から起つた天文學が、大天才  
トレミーに依て天動説に纏められ、それに結んでプラトンの  
哲學が榮え、次でコペルニクスの地動説、ガリレオ、ニュウ  
トンの天體運行論が提唱されて如何に哲學界が動搖したか。  
更にラプラスの星雲説、ハーシエルの銀河宇宙説が擡頭して  
我等の宇宙觀が如何に擴大せられ、今又、アインシュタインの  
新説は天文學に論據を据えて空前の思想革命を喚起してゐ  
る。本書は斯くバビロンの肉眼觀望時代から一九二四年のジ  
ーンスの新星雲説時代までの學説の變遷とそれによつてはる哲  
學界思想界の動搖を説いたもので人類共有の大思想史とも云  
ふべく、新世紀の宇宙觀を把持せんとする新人の必讀書。

理學博士 山本一清教授主裁

# 天文同好會

天文の趣味を養ひ、興味を進め、研究を助け、進歩を圖る。  
圖書雜誌を出版し、講演會講習會を開き、天體の觀望と觀測とを行ふ。  
京都帝國大學天文臺に本部を有し、國內國外三十ヶ所に支部を置く。  
會員一ヶ年參圓六十錢 誰でも歡迎。

機關雜誌二種

## 天界

BULLETIN

毎月一回、價參拾五錢、日本文及び英文。  
内外獨歩の豐富な曆表が毎月の天象を豫告する。  
毎月數回(不定期)、非賣品、本會の觀測部員及び希望者に  
實費で分つ、天文界の消息、新彗、太陽觀測報告、變光星報告、船  
橋を要する天文界の修正値、新彗、太陽觀測報告、變光星報告、船  
急無線報告、内外天文學界來往消息、其の他。  
日食月蝕の豫報、内外天文學界來往消息、其の他。



547  
103

15年 3月 23日

三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三
三	三	三	三	三	三	三	三	三

調查濟



終

